

平成28年度 第4回小田原市社会教育委員会会議概要

- 1 日 時：平成29年2月14日（火）9：00～12：00
- 2 会 場：小田原合同庁舎 2E会議室
- 3 委 員：木村議長、笹井副議長、有賀委員、角田委員、柏木委員、齊藤委員、瀬口委員、長峯委員、深野委員、益田委員、宮内委員
- 4 職 員：関野文化部長、安藤文化部副部長、杉崎文化部副部長、大木生涯学習課長、内田文化財課副課長、古矢図書館長、尾沢スポーツ課長、石井青少年課長（事務局）
濱野生涯学習担当副課長、高橋生涯学習係長、松本主査、渡邊主査
- 5 傍聴者：なし

6 概 要

1 文化部長挨拶

関野文化部長が挨拶をした。

（公務のため、退席）

2 報告事項

（1）平成29年度予算概要について

資料1に沿って、教育委員会の補助執行のものうち、文化部所管のものについて杉崎文化部副部長及び安藤副部長から、子ども青少年部所管のものについて石井青少年課長から説明した。

【益田委員】 官民協働によるまちづくり担い手育成事業の中の「小田原まちづくり学校」を発展させるかたちとあるが、この小田原まちづくり学校というのはいつ頃からやっていて、どのようなものなのか。

【生涯学習課長】 小田原まちづくり学校の概要だが、平成23年頃から始まっている事業で、所管は教育委員会ではなく、企画政策課が行っている事業である。平成28年度も継続して行っている。官民協働によるまちづくり担い手育成事業については、平成30年度からスタートし、平成29年度は準備期間となっている。内容については、まちづくりの様々な課題を1年間で1つか2つくらい選定して、既にまちづくりの活動を担っている方々を対象に公募して、2回から3回くらいの課題解決の講座を行い、それがそのまま活動につながっていく内容である。例えば、再生可能エネルギーの問題などをこれまでテーマとして行ってきた。

【木村議長】 今までは企画政策課が行っていたということか。あまり皆さんは知らないかもしれない。知らないから質問したのだろうと思う。それが今度、

所管が変わって生涯学習課でやるということか。

【生涯学習課長】 まちづくり学校を少し発展的に捉えて、まちづくり学校は年間2、3回の講座で行っていたものを、この新しい事業では半年から1年くらいの長期の人材育成講座という形で考えている。テーマもまちづくり学校の方は毎年変わっていたが、新しい事業ではテーマをある程度固定して、長期間取り組んでいきたいと思っている。テーマも大体10くらいを想定して、それを継続的に行う形で考えている。

【木村議長】 地域は地域でまちづくりはやっているし、あまり同じようなネーミングでやられてしまうと、一般の人が分かりづらいのかなと思う。

【生涯学習課長】 様々な所管で、人材育成の講座が行われているが、こちらの事業にある程度一本化というか、集約できるようなことも考えているので、混乱のないようにしていきたい。

【深野委員】 10番の井戸曲輪内の工事が非公開となっているが、私も見に行ったことがあるが、特殊な積み方をしていて、誰でもできる工事ではないと思う。むしろこういう工事は指定した業者ではないと無理ではないかと思う。どういう考えで、入札で非公開という形になるのか。

【文化財課副課長】 史跡石垣山は野面積みという形で、非常に貴重な石垣で、特にこの井戸曲輪はその形がよく残っている。ただし、地震や長年の経年劣化で多少落石があったり、危険な箇所もあるので、その測量と保全対策を行おうとするものである。専門の業者も、1社のみということではなくて、複数社あるので、その専門業者同士で入札で競っていただき、その技術と経済的なところを両方、フォローしていければということを考えている。

(2) 平成29年度社会教育関係団体への補助金について

資料2に沿って、大木生涯学習課長、内田文化財課副課長、石井青少年課長からそれぞれ所管の補助金について説明した。

【深野委員】 2番目の文化財の補助金だが、国、県、市の指定がそれぞれ分かれており、補助金がそれぞれ出ていると思うが、その割合はどうなっているのか。

【文化財課副課長】 基本は、県が2分の1、市が4分の1以内だが、予算の査定もあり、上限まではいっていないが、予算確保をできる限り努力している。今回の301万5千円は、補助割合までは到達していないが、努力して確保している。

【深野委員】 補助金について県と調整することはあるのか。例えば、県指定の文化財を修理するとき、1,000万かかるが、県は500万、市は500万も出せないのか、県の方でもう少し出せないか、というような話はあるのか。

【文化財課副課長】 例えば、寶金剛寺真言八祖像の修復事業は、暦年で平成28、29、30年と順繰りに補助していく予定だが、その補助計画については、神奈川県と調整しながら、県の上限は2分の1ということになっているが、県も必ずしも2分の1全額出せない状況であるので、その辺は市の方も多少随伴する形で、所有者の方と調整しながら、予算確保に努めている。

(3) 社会教育事業の結果及び予定について（平成28年12月～平成29年3月）

資料3に沿って、順次各所管の社会教育事業の結果と予定について報告した。

【有賀委員】 生涯学習課の2月4日のキャンパスおだわら行政講座「～親子で遊ぶアート～ダンボールでつくる等身大の自分」の当日の受付をやった。先日、タウンニュースにも掲載されていたが、けやきホールのリニューアルイベントに相応しい、楽しい内容だったと思う。申込み制だったが、直接来た親子もいたので、第2弾を計画してもよいのかなと思った。また、図書館の1月29日の藪内正幸さんの一日美術館と講演会に行ってきた。本当に大盛況で最後まで楽しめた。もっと若いお母さんたちが多くかと思ったが、参加者はご高齢の方が多かったように思った。講演は藪内さんのエピソードを中心に進められ、戦後何もなかった時代に動物園通いを楽しみにして、才能を開花させたという内容で、今のスマホ時代の若いお母さんたちにも聞いてほしい内容だった。

(4) 小田原市博物館基本構想について

資料4に沿って、生涯学習課長から説明した。

【深野委員】 構想の実現に向けてのスケジュールリングはある程度明確になっているのか。

【生涯学習課長】 小田原市の後期基本計画の中で、基本計画を策定していくことを目指しているということが今の段階で言えることである。その後のスケジュールは、まだ未定である。

(3) 第二次小田原市子ども読書活動推進計画の策定について

資料5に沿って、図書館長から説明した。

【有賀委員】 「第二次小田原市子ども読書活動推進計画の策定について」の2(3)ウの学校における読書活動の推進に関するところ、学校図書館司書に関する件が2つあった。特に6の司書の配置時期を4月にしたいということについては、学校図書ボランティアとの連携を図るうえで、早い時期の配置の方がよいと思う。また、司書の方もその方がよいと思っていると思うが、やはり予算執行の制約があるという市の考え方によっては厳しい

と思う。私が図書ボランティアとして活動している矢作小学校では、図書ボランティアが、1年生を対象になるべく早い時期に、図書室の使い方等について、紙芝居で伝えている。図書ボランティアの方でも早い時期に子どもたちとコミュニケーションを取れるように活動しているので、参考にしてもらえたらと思う。

【図書館長】 今の意見については、先の教育委員会定例会の時にも、話題になって、その際、平成29年度から雇用形態を直接雇用に変更するという計画で動いており、今は5月の半ばからだ、遅くとも、4月の半ばぐらいから学校図書館の動きをスタートさせたいということで改善に向けて進んでいるという意見を教育指導課の方から報告した。

【瀬口委員】 感想だが、5歳の娘がかもめ図書館で、「ママ、読んで。」と言って持ってきた本が島崎藤村の「初恋」で、こんな本を5歳の子が読むのかと思ったら、1カットだがきれいな挿絵で、娘が理解できているかどうかは分からないが、言葉の響きにすごく何か感じるものがあった、「何度も読んで、読んで」と言うので、何度か繰り返し読んだ。昔、小田原市でブックファーストがあったときに、2冊もらっていたようなので、1冊は赤ちゃんが喜ぶ短文の普通の絵本でいいかなと思うが、もし、2冊配るなら、2冊目は北原白秋の童謡などのきれいな、小田原だからもらえるようなものがあるのか、確認したら、なかったの、そういうものがあったら子どもたちも、もっと親しめるのかなと思った。

【図書館長】 大変いいアイデアをありがとうございます。また、前向きに何かいただいた意見でできないか考えてみたいと思う。

【深野委員】 この計画案の中身をみていると、小田原に関係するところがどれだけ書いてあるかと思ったら、15ページのところに「小田原ゆかりの童謡・詩歌の普及」等があるが、子ども向けの小田原の歴史の本の充実をもっとしてほしい。私が去年出した本の中でも、座談会で小田原に初めて来て、子どもに小田原のことを勉強してもらおうと思って図書館に行ったら、全然なかったというようなことを聞いているので、やはり子どもときから郷土を知るという意味での子ども向けの郷土の本の充実というの、是非取り組んでほしいと思う。

【益田委員】 現在、ブックスタートを行っている自治体で、今やっている啓発事業の他に何かやっているのか。

【図書館長】 赤ちゃん絵本のブックリストみたいなものを作って、配布している。ブックスタートの廃止のときに、計画されたもので継続している。後は、小さい子どものお母さんを対象とした読み聞かせの講座を実施したこともあ

るが、特に新しく整備される駅前の図書施設の方に気兼ねなくお子さんを連れて来れるような計画を作っていきたいと協議しているところである。

3 協議事項

今期の研究調査テーマ及び検討方法について

資料6に沿って、生涯学習課長から説明した。

【木村議長】 まずは、主題として学びのための地域と学校との連携について、副題として連携のための人材育成で、これから皆さんと議論をしていこうと思っている。そこで、本日の会議では、地域と学校との連携、又は連携のための課題等について、まずは委員の皆さんがどのように思っているのか、ざくばらんに話をさせていただければと思っている。いかがか。

【深野委員】 前は、学校の両校長先生が出席されていない中で、学校との連携はいいという話になったと思うが、今日、是非二人の校長先生から意見をいただきたいと思ういかがか。

【木村議長】 地域と学校との連携の中で、率直に何でも結構なので、うまくいっているところもあれば、なかなか地域とうまくいっていないところもあろうかと思う。学校は学校のできることをやってもらって、できないことを地域に振られると、問題が固まってくるが、地域のことを踏まえてでも結構なので、長峯先生、いかがか。

【長峯委員】 酒匂中学校の現状だが、今はどこの学校にもスクールボランティアコーディネーターがいるので、その方を通して地域の教育力を活かしていこうということで、ボランティアの方に入ってきていただいている。酒匂中は、先進的な方だと思う。私は平成14年からいるが、その前からそういう制度があった。最初は、ゲストティーチャーという名称でやっていたが、ティーチャー、先生というところで、非常にハードルが高いということで、スクールボランティアという形になってきたと思う。現状、酒匂中をみると、いろいろな教科の中で、特に技能教科の方、私が体育の教員るときには、印刷局があったので、印刷局にはプロの選手並の実力をもったソフトボーラーがたくさんいたので、その方に来ていただいて、授業をやっていただいた。私の補助をやっていただいた。技能教科で技術家庭だとか、たくさんの方がいた方がいい教科は、すぐボランティアに入ってきていただいている。ただ、五科の方の教科になるとちょっと難しい部分もあると思う。例えば、社会科でボランティアを入れると難しいところもあったように思う。国語だと、地域に習字が指導できる方もいるので、その方に来ていただいて、みていただくことはできたと思う。学校としてコーディネーターを通して必要な人材を派遣してもらおうという流れが、現状だと

思う。今回、この形がどこまで何を求めているのかが、青写真が見えないので、意見は言い辛いと思っていた。連携のための人材育成、どのような人材が必要なのか、ここから議論なのかという、かなりこれからの話し合いを進めていくのは難しいことではないかと思った。今、学校はスクールボランティアコーディネーターのおかげで、地域にいらっしゃる方の教育資源を入れてやっている。それがすごく効果が上がっているかどうかは、また別問題だと思う。教科によっても、違っていると思う。

【宮内委員】 地域と学校の連携は充実していると思う。地区によって様々あると思うが、長峯先生が言われたように、ボランティアでいろいろな方が入ってくれたり、体験学習で田んぼを貸してくれたり、いろいろなことについて講義をしてくれたりと、この主題の部分では、なかなか学校としては、いい方向に向いていると思う。学校の中では、学びの場が地域と連携しながらできているが、学びの場は学校が中心になっているので、地域の中での学びの場はどのようなものがあるのかを考えたとき、なかなかそのところが難しい状況である。例えば、子ども会の関係だとか、地域の中で自治会の方がいろいろ苦労して子どもたちを集めたりという部分でも、保護者の地域のつながりというところでは、学校を介すると人も集まるし、親も来るが、地域の中でとなとなかなか難しい部分がある。しかし、学校として、職員と全面に出て行って地域の中で一緒に活動というのは難しい部分がある。学校として地域とどのように連携していくのかを考えていたが、逆の部分から学校を見たときには、新たな視点として、学校として何ができるのかを考えていかなければいけないと思う。主題としては進んでいるが、副題としては、整理していかなければいけない。

【益田委員】 私が感じているのは、小学校の方は、親の方も学校に入りやすい。酒匂小学校は、地域のお母さん方が入りやすかったりするが、中学校になると、なかなかスクールボランティアも集まらなかったりとか、コーディネーターも見つからなかったりという現状がある。学びのための地域と学校の学校が小学校と中学校では、現状が違うのではないかと思う。小学校の方が開かれ始めているが、中学校になるとそうではない。本来なら小学校は保護者が入っていくが、中学校では親が入っていくよりも生徒の方が地域の方に出て行ってもらいたいという感じだと思う。それを踏まえて、人材育成をさらにどう考えていくのかはかなり深いものがあると感じている。

【木村議長】 今、益田委員が言ったように、確かに中学校になると、狩川の清掃をやるので、泉中学にお願いして生徒を出してほしいという、体育会系に人が来てくれる。そのように来てくれると、地域の人と生徒がそこでいろいろな話ができるという形もある。これをやらなければいけないということだ

はなく、これからは、小学校も中学校もお互いに地域と連携しながら、子どものことでいろいろな考え方があると思うので、今日はフリートークなので、是非自由に発言をしてほしい。

【有賀委員】 私は、以前スクールボランティアのコーディネーターをやっていた。この主題の学びのための地域と学校との連携についてということで、スクールボランティアに関しては、コーディネーターの力で学校の中も充実してきたと感じる。ただ、連携のための人材育成では、コーディネーターの育成が課題であると感じる。やはり、コーディネーターを探すときに、いつも苦勞しているのが、コーディネーター自身が自分で後任を探しているという点である。なかなか辞められなくて継続している方が多い。また、中学校区ごとにコーディネーターの連絡会を年に何回か開催している。幼稚園、小学校、中学校のコーディネーターが集まっているいろいろな情報交換を通して連携を図っているが、連絡会を通して「コーディネーターはそんなに大変じゃないよ」とか「やれば楽しいよ」とか、そういった意見交換の中で、人材育成に結び付けていけたらと感じる。

【瀬口委員】 地域といえどどういう世代が地域なのか、例えば、幼稚園だったら、PTAとして、私はいつも先生方に感謝の気持ちを込めて、PTAの活動に私が何かサポートできるなら、何かしたいと思ってやっているが、わざわざお金をもらっている職場を休んでまで、そんなことをする必要がない、私が望むことを公的機関や学校がしてくれないなら、PTAは入らなくていいというような方々もいる。そこはサポートされなくても、私はしつけなどは親がするべきだと思っているが、「あなたは非人道的だ」とか「そういう人がいるから子どもを3人以上産めないんだ」とか言われる。その方たちが地域といえど、子育てがある程度終わって、介護がない世代という方だが、その方たちは、今働いているので、そんなにサポートはできないと思う。やはり現在、学校や幼稚園などにいっている保護者が、主な地域の人材になるべきではないかと思う。

【木村議長】 小学校でもPTAの総会があってもなかなか父兄が集まらない。授業参観にその日をもってきて、母親に来るようにしている。今は、地域の役員も高齢化しており、どこでも人材はほしい。夫婦で勤めていて参加できない人が多くなってきている。これから先、もっと高齢化が進んできたら、本当に大変だと思う。地域のおじいちゃん、おばあちゃんが子どもの登下校を見守ったり、いろいろなことをやっている。登下校の見守りも本当なら、お父さん、お母さんが少しの時間でもいから、地域のみんながいれば、30分居なくても済む。ところが、「あそこで立ってください。」、と言うと、「その時間は無理です。」となる。朝や夕方など仕事が終わって帰って

きて、家の前に立って「お帰りなさい。」と言ってやれば、見守りになる。そうすれば、各地域にお父さん、お母さんが居るので、そのようなやり方もあると思う。学校は学校、地域は地域、と分けなくて、なんとかみんなで作っていかねばいけないと思う。

【齊藤委員】 連携は必要だと思うが、連携の内容として学校の中で、それを事業化していくことをメインにして考えていくのか、あるいは、学校内の放課後の連携という部分を強化していくことを考えるのか。学校の中でのコーディネーター機能は、スクールボランティアにも小田原市はとても歴史があるので、その部分で、十分役割が果たしているのではないかと考えているが、学校外のところでは、例えば、4月からまた小学生が入ってくるが、放課後の時間が非常に長いので、その放課後の時間をサポートできない親の層は多くいるので、その学校外の時間の充実を考えるための連携を考えるのかということが1つ目の観点としてあると思う。2つ目の観点として、連携を考えた場合、コーディネーターの人材育成は、やっているようで、一番効果が上がらない講座だということがよく言える。まちづくりコーディネーター講座とかは、あらゆるところでやっているが、自分がコーディネーターだと思っていても、コーディネーターに合う人と、とても合わない人があるので、これの人材育成というところを主たる社会教育のゴールと考えるなら、あまりうまくいかないのではないかという感触をもっている。3つ目だが、今回、学校と地域の連携は、国の政策の1つでもあるので、それを実際に、小田原市でも強化していくということを考えた場合に、何をもって強化ができるのか、どんな効果を目指していくのか、可能性というものを検証していかないといけないと思っている。先ほど、次年度の社会教育費の予算の話があったが、かなり多くの事業を実施している。その事業の中でも、ほとんどみんな体験学習といったことである。これは、ほとんど学校外の授業だが、実際こういった体験学習といったものを、社会教育がやったとしても、参加している人はいつも同じ顔の人ばかりが参加しているという現状が実際あると思う。学校外の活用授業として連携することによって、学校外に目を向けてくれる人が増えていくことがある。連携といったところでは、学校の中を充実させるための連携なのか、学校の外の郊外の時間を充実させるための連携なのか、絵を描いてただ終わりになってしまうがちなので、考えていかねば必要があると思う。

【木村議長】 昔は小学校でも中学校でも、学校が終わると地域で遊んでいた。今は、子ども会が衰退してきている。サッカーやソフトボールを学校終わりや土曜日曜にやっているが、そのようなクラブに入っている子どもはいいが、地域の中でできない子がいると、子ども会は必要である。小学校6年生にな

ると会長をやらされそうだから、「もう小学校5年生で子ども会を辞めます。」というような形で子ども会が衰退してきている。土日にソフトボールなどできない子どもたちをどうするか。あるところは、子ども会など作らないで、地域の子どもはみんな来いという形でやっている自治会もある。学校、幼稚園、中学校が、これからは連携を深めていかないといけないと思う。

【宮内委員】 桜井小学校には土曜クラブがあり、学校の施設を使って、体育館で球技をやったり、運動的なことをやったり、工作室を使って物を作ったり、小さい子には親が付いたり、卒業した子どもたちがリーダーになったりと、そのために学校は職員が鍵を開けたりだとかしているが、後は地域の方がやってくれているものがある。学校を場として活動しているというものがある。

【角田委員】 今の桜井小学校の土曜クラブで教えている人が知り合いだが、ものすごく子どもたちが参加して、とてもにぎやかでいいと聞いている。もう一つは、地域の小学校で、スクールボランティアをしている人がいるが、地域との連携は取れているということである。

【深野委員】 今回の主題がなぜ出てきたのかを振り返ってみると、昨年度から施設の老朽化だとかで学びの場をどうしていくかという議論があって、公民館もボロボロになってきている中で、学校は場として使えるというところがあった。場としての話がきっかけになっていると思うが、今の宮内先生の話から、学校側というのは、学校の場ということではなくて、地域の方に出て行くというニーズもあるのかと思った。学校の場は、土曜クラブのように充実している。学校のニーズと地域のニーズとは違う。そのニーズのずれをきちんとすり合わせして、何をやろうとしているのかを共有化しないと、連携とかコーディネートとか人材育成とかはすごく便利な言葉で、分かったような気がするが、実際に何をやるかとなるとあまりにも漠然としていて、よく分からないというのが実態なのかなと思う。コーディネーターが作る連携とはどういうことなのか、コーディネーターは何をすればいいのか、ということも学校側のニーズも地域のニーズも踏まえたうえでの議論をしないと、漠然として抽象的な議論で終わりがねないのかなと思う。例えば、学童保育があるが、共稼ぎが増えているので、学童保育の生徒が増えていると思うが、学童保育は教育の場なのか、私はよく分からないが、単に預かっているだけなのか、そこで何をやろうとしているのか、学童保育のところをもっと充実するという議論をするなど、もっと絞らないとなかなか議論がまとまらないのかなという気がする。学校と地域のニーズをきちんと踏まえた議論をしていく必要があると思う。学校としての考え、

地域としての思いをすり合わせする必要があるのかなと思う。具体化し共有化することが大事だと思う。

【木村議長】 地域には地域のニーズがあり、学校には学校のニーズがあるので、それをどうやってマッチングするかというところだと思う。それをすべてコーディネーターに任せるのではいけないと思うので、それは皆で考えていかなければいけない。学校の課題、地域の課題を出し合って、マッチングができると、地域と学校との連携が見えてくると思う。地域と学校の連携について、事務局の方で何かあるか。

【生涯学習課長】 もう一度振りかかっていただくと、前回「地域における学びの場のあり方」で答申をいただいたが、この答申をいただくにあたって、平成27年12月に中教審から答申が出た。それを参考にして、答申を作ったところもあるが、その答申をもう一度振り返ってみると、大義としては、新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方を掲げており、その中でこれからの学校と地域の目指すべき連携・協働の姿のところに3つ掲げている。1つは、地域とともにある学校への転換で、これは学校からの視点から、もう1つは、学校を核とした地域づくりの推進で、学校を核として地域づくりを進めていくというもので、もう1つは、子供も大人も学び合い育ち合う教育体制の構築というところで、地域の様々な機関や団体等がネットワーク化を図りながら、学校、家庭及び地域が相互に協力し、地域全体で学びを展開していく子供も大人も学び合い育ち合う教育体制を一体的・総合的な体制として構築というところであり、この3つの視点が、中教審の答申の主なことになっている。最初のところは学校の視点、一つは地域の視点、最後が個人的な考えだが、社会教育、生涯学習からの視点であると思っている。その3つのところが重なり合うところが、これからの地域と学校、生涯学習の連携があるものだと思う。様々な議論の中で、学校側からの問題点、地域の課題、もう一つの視点として、社会教育、生涯学習においても、地域とどうしていくのかという視点があろうかと思う。これについては、この視点で前回の答申は作られているかなと、思っている。今、地域における社会教育、生涯学習はどうなのか、というと、先ほど深野委員が言われたように、今、地域においては、地区公民館が中心になっているが、そちらが現在131館あるが、老朽化してきているだとか、さらには、生涯学習センター分館があるが、こちらはも、今はほとんど貸館だけで、そこで何か事業を展開するというのは、人的にも予算的にもない状況である。建物自体も市の支所と併設されており、今後、地域の中で学びの場の充実、永続性を目指していくことが重要であるとしているが、そのために学校を舞台として社会教育、

生涯学習が展開されなければいけないということが答申の核となっている。これは、まさに生涯学習からの視点であると思っている。この生涯学習の現状はどうかというと、今言ったように、非常に厳しい状態にある。今、学校と地域の連携を図ろうとしているところで、他の自治体においても、公設の公民館が主に小学校単位くらいで、整備されているところが多くなっている。ただ、小田原市の場合は、そういった方策をとってきていないので、今、地区公民館という自治会が建てた公民館が、131ある。一方、小学校単位では、小学校が25校、さらに地域のまちづくりというのが、今、26の連合会単位で行われている。館としては、大体地域と同じようなところで合ってきているところがあるが、社会教育、生涯学習については、地区公民館、単位自治会で行われているので、その連携にはなかなかいっていない。学校単位で、今後、社会教育、生涯学習を考えていったときに、社会教育、生涯学習としてのエリアというか、大きさというか、そのような機能は必要になってくると思う。端的にいうと、小学校単位での生涯学習の学びの機能がないので、そうしたところをどうしていったらよいかというところがある。そこには、人材が必要なのかなというところで人材育成が必要になってくると思う。そういったところから議論を進めていっていただければと思う。次回は、その現状を説明させていただき、その課題を整理していただき、その視点で議論をしていただければと思う。

【笹井副議長】 学校と地域の連携は、かれこれ30年くらい前から総論的には言われてきて、自治体や政府、学会でも言われてきた。ただ、中味はどんどん変わってきているのが現状だと思う。90年代は、学校開放授業ということで、体育館とか校庭を住民に開放しましょうと、これが学校、家庭、地域の連携の主たる中味であった。そのときの主役である地域の人たちやスポーツ団体や文化団体が、借りてやっていた。ところが2000年に入ってきて、子どもを巡る環境が悪化してきた。親の教育力や地域の団体の教育力がなくなったなど、子どもへの関わり合いが減ったのではないかと、子どもの成長に悪影響を及ぼしているのではないかという議論になってきた。その後で、教育基本法が改正されて、13条に学校、家庭、地域住民の連携という一文が入った。学校、家庭、地域住民のと書いてあるが、住民の人は、学校に関わるのはとても大事だという認識が法律を作った人の頭の中にあると思う。地域での関わりが減ってきて、老人クラブや町内会も含めて、いろいろな問題を引き起こしている。PTAに入りたくないが、入らされたということで損害賠償請求のケースもあり、すごい時代になっている。そうすると、子どもに関わるいろいろな人たちの数が大幅に

減ってきており、子どもにとってはマイナスである。それは、なんとか回復させたいということで、従来の地域での関わり合いというものを、ある種、学校の中でミニコミュニティみたいなものを作って、そこで復活させようというのが、最近の流れである。先ほど、生涯学習課長が言ったのは、まさに、生涯学習分科会の答申である。学校教育部局ではなくて、生涯学習部局がやっているの、すごく地域の人を強調している。地域の活力を出していきましょう、地域住民の生きがいを作っていきましょうという視点がある。ただ、実際に現場では、地域住民のためというよりは、子どものために、先生のためと言わないと求心力がないので、子どもの豊かな成長のために関わらましようということである。関わりはいろいろあると思うが、学校の環境整備もあるし、部活や職場体験に関わることもあるし、あるいは教科に関わってくると思う。いろいろなレベルがあると思うが、関わることで、子どもを豊かに成長させる、その副産物として、地域住民として得るものがたくさんあるだろうという論理になると思う。こういうことをやると従来の学校だけでなく、学校だけでできなかったことができるようになった、ある種の成果を議論することが大事で、その次に、そうはいつでもいろいろな課題がある。課題の中心は、コーディネートする人がいないということだと思うので、そこで人材育成の話が出てくるのではないかと思う。

【深野委員】 私自身の生活の中で、地域で子どもに会う機会がほとんどない。朝、ゴミを捨てに行くときに、あいさつするくらいである。地域で子どもたちを見ることがない。地域と学校といっても、子どもとの接点がほとんどない。家の裏に子どもがいるが遊んでいるところを見たことがない。それが今の時代なのかなという気がする。やはり必要なのは、地域にとっても、また子どもにとっても、大人とか年寄りと触れ合う場がないということは、非常に大きな成長上の問題かなという気がする。今回のテーマの非常に重要な側面は、地域と子どもたちの出会いの場を、子どもの教育という立場からいっても作っていかないといけないのではないかと思う。

【木村議長】 私のところでは、最近、夏祭りを止めて、秋にフェスティバルをやっている。そこに中学生にボランティアで入ってもらって、売り子をやってもらって、幼稚園の子どもたちが来て、親も来てにぎやかになる。これから少子高齢化になってきて、子どもが少なくなって、1日子どもの声を聞かないこともあると思うので、いろいろなことを考えていかなければいけないと思う。これから、子どもが減ってきて、空き教室が出来たら、学校を開放してもらって、そこで地域の人が集まるといいのかなと思う。

【宮内委員】 学校の子どもたちが外で遊んでいると、田んぼだとか、道路でボールで遊

んでいて、また子どもが帰りにリコーダーを道で吹いていて、うるさいと言われると、子どもをいかに迷惑をかけないようにという視点になってしまい、学校としては、子どもが地域の中で自由に遊んで、みんなで見てくださいというようなことを言えない状況がある。このままいったら、子どもたちがどのように育っていくのかという不安がある。

【木村議長】 今日、皆さんにいろいろな意見を出していただいた。最後に有賀委員から放課後子ども教室の取組みについての説明をお願いします。

(有賀委員から資料に基づき、「放課後こども教室」について話があった。)

【木村議長】 事務局から何かあるか。

【生涯学習課長】 次回の会議だが、5月中旬を予定している。予定が決まり次第、連絡させていただく。

前回の会議で、県の社会教育委員連絡協議会から本市の社会教育委員の取組みについての寄稿依頼があったが、深野委員から原稿をいただいた。ありがとうございました。

【木村議長】 重ね重ね、ありがとうございました。それでは、本日の社会教育委員会議は、これをもちまして閉会とさせていただきます。長時間、ありがとうございました。